

森林総合研究所における 女性研究者支援と ワーク・ライフ・バランスの 実現に向けた取組み



FFPRI GEO

独立行政法人 森林総合研究所

男女共同参画室

Gender Equality Office



ご挨拶



エンカレッジ推進本部長
鈴木 和夫

わが国における科学技術の推進には優れた女性研究者が男性研究者とともに活躍できる環境の整備が喫緊の課題となっています。

森林総合研究所は、平成19年度文部科学省科学技術振興調整費女性研究者支援モデル育成事業「応援します!家族責任を持つ女性研究者」の採択を契機に、男女共同参画室を設置し、エンカレッジモデルにより、男女共同参画の推進と男女を問わずワーク・ライフ・バランスを図るための職場環境・研究環境の整備に取り組んで参りました。

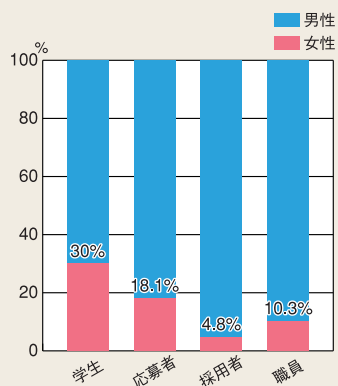
エンカレッジモデルは、研究・業務か家族かの二者択一ではなく、仕事（ワーク）と生活（ライフ）の調和をシステムとして構築することによって、それぞれの能力が存分に発揮される魅力あふれる研究所の実現を目指すものです。

モデルの実施にあたっては、推進本部アドバイザーとして日本の女性学のパイオニア、文化人類学の世界的権威でもある原ひろ子先生（お茶の水女子大学名誉教授）にお願いし、適切なお助言を得ながら本モデルを推進しております。さらに、関係機関との友好な協力・連携関係を深めつつ、女性研究者支援事業の進展に貢献し、エンカレッジモデルの一層の充実を図る所存です。

関係各位のご協力をご鞭撻をお願い申し上げます。

森林総合研究所における女性研究者の現状

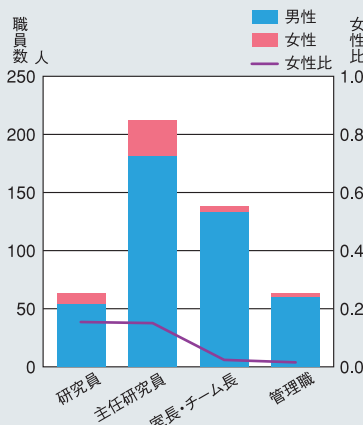
女性研究職員比率は1割、
最近5年間の女性採用比率は4.8%



女性の割合

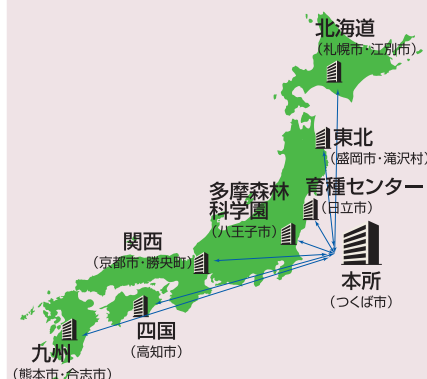
- ・学 生：平成18年度 学校基本調査、
- ・応募者・採用者：平成16～20年度の平均、
- ・職 員：平成21年度

女性研究者の管理職は1.6%



職位別男女別研究職員数と女性比率
(平成20年4月)

野外出張や転勤の多い職場



本所・支所・育種センター・育種場の配置

森林総合研究所エンカレッジモデルの4つの柱

1. 推進体制の整備

- 男女共同参画室の設置
- 裁量労働制の導入
(研究職員 H21年7月～)
- 時間短縮勤務の検討
- 休暇制度の改善検討
- 子育て支援などの相談窓口設置
- 育児関連の各種制度の
ガイドブックの作成と周知

2. 育児・介護サポート システムの整備

- 所内一時預り保育室の開設
- 保育・介護等の地域情報の提供
- 育児・介護研究者に対する研究支援
(PC・ソフトウェアの貸与、
研究補助員の雇用)

3. IT環境の整備

- テレビ会議システムの構築
(本所～支所等間)
- WEBミーティングシステムの構築
(研究室～自宅間)

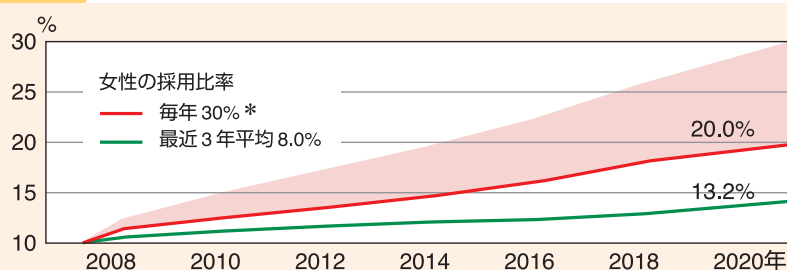
4. 次世代研究者育成支援

- 男女共同参画意識の啓発活動
(所内意識調査、所内セミナー、
公開シンポジウムの開催等)
- 女性研究者応募促進の
ための広報活動
- 採用時の家族責任履歴の配慮

ミッションステートメント (エンカレッジモデルの達成目標)

- 裁量労働制の導入(研究職)
- 出張・転勤、緊急時のサポート体制の整備
- IT環境の整備(本～支所等間、研究所～自宅間)
- 応募者・採用者の女性比率を30%に
(関係大学の女子学生比率と同等に)
- 家族責任が原因となる中途退職者ゼロに

研究職員の 女性比率の 推移(予定)

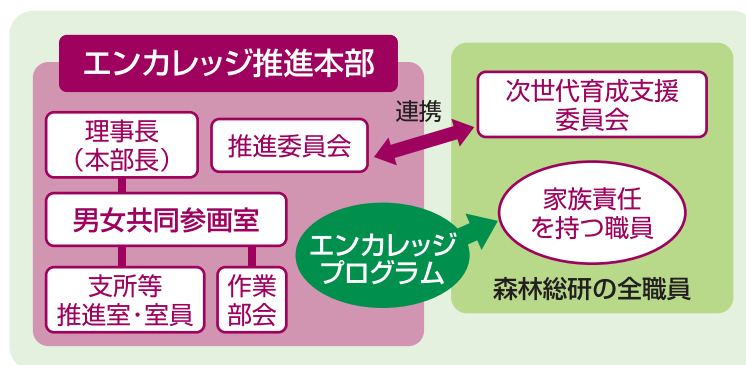


* 期待される農学系研究者の女性採用目標(第三期科学技術基本計画)

指導的地位の
女性比率 30%
男女共同参画
基本計画(第二次)

1. 推進体制の整備

エンカレッジモデルを推進する「エンカレッジ推進本部」を設置するとともに、男女共同参画室を新たに設置し、推進体制を整備しました。



推進本部アドバイザー
原 ひろ子氏
(お茶の水女子大学名誉教授)

男女共同参画室
の設置

平成20年2月～企画部に男女共同参画室設置
(室長、兼務職員2名)

勤務・休暇制度
の整備

- 研究職に裁量労働制を導入（平成21年7月～）
- 子の看護休暇その他の制度が改正・新設（平成21年1月～）
 - ・子の看護休暇の対象範囲・取得可能日数の拡大
 - ・「早出・遅出勤務」、「休憩時間短縮の特例勤務」および「育児を行う職員の深夜勤務等の制限」の対象範囲の拡大
 - ・乳幼児の健診&予防接種に伴う職務専念義務免除
- 育児・介護休業中の研究に関わる Q&A のページ開設（平成20年5月～）

男女共同参画室
HPの開設

様々な情報発信に活用
(平成20年2月～)



<http://encr.ffpri.affrc.go.jp/>

2. 育児・介護サポートシステムの整備

所内一時預り保育室の開設

森林総合研究所の職員の子ども（乳幼児・児童）を対象に、病後児などに対応する一時預り保育施設として「どんぐりる一む」を本所に、「すぎのこ」を関西支所に設置し、運営を開始しました。



▲本所（つくば）「どんぐりる一む」



▲関西支所（京都）「すぎのこ」

所内一時預り保育室開設記念講話より（抜粋） 平成21年4月28日

エンカレッジ推進本部アドバイザー 原 ひろ子先生（お茶の水女子大学名誉教授）

保育室の開設、誠にありがとうございます。

人生の諸段階で必要とされる多様なケアは、家族のみでなく職場、地域社会、政府などが多角的に連携して推進される必要があります。さらに、ケアの領域だけでなく、家庭、趣味、スポーツ、地域活動などの領域で「ワーク・ライフ・バランス」の中の「ライフ」の部分であらゆる年齢の男女が重視して、今後の日本を設計していく必要があるのではないのでしょうか。

日本男性が家事・育児・介護等にかかる時間は、共働き世帯で30分（妻は4時間30分）、夫が有業で妻が無業の世帯で39分（妻は6時間21分）と報告されています。これと関連しているかも知れない現象が40、50歳代の日本男性の自殺率の高さです。「仕事人間」となっている男性が抱える大きな危険を反映しているといえましょう。「男の人生は仕事！」とのみ決めつける傾向の故でしょうか。これからの時代は、男性も女性も「ワーク・ライフ・バランス」の取れる人生を送る必要があります。それによって男性の自殺者も減少することを期待したいものです。

利用者の声

本所職員の利用（立地環境領域 Aさん）

今年の3月、学会の直前に、1歳5ヶ月の息子が水ぼうそうにかかってしまいました。学会で自分の研究成果を発表したり他の研究者と情報交換を行ったりすることは、研究推進のために欠かせません。そこで、開設間もない研究所の一時預り保育室を利用しました。どんぐりる一むでは、保育士さんがマンツーマンで息子を手厚く保育してくださったので、病後児を安心して預けられました。通常の保育園に預けるには不安がある病後児を、安心して預けられる場所があるのは、仕事をするうえで必要不可欠であると実感しました。

（取材 平成21年3月）



本所での研修期間中の利用（支所職員 Bさん）

「どんぐりる一む」ができてよかった！というのが一番の感想です。今回、廊下や食堂、バス停などで多くの見知らぬ職員さんから『「どんぐりる一む」ですか？』などと気軽に声をかけてもらえました。このような施設があることによって、職場に子供がいるということが、不自然ではなくなってきているのではないのでしょうか。それは、とても重要な事だと思います。

ただし、保育室で必要な荷物（シーツやタオルなど）を、出張時に持参するのは大変です。今回は、本所の友人が貸してくれたので、とても助かりましたが、支所の職員が「どんぐりる一む」を利用する場合は、本所の方々のサポートは欠かせません。その点、ご協力をよろしくお願いいたします。

（取材 平成21年7月）



2. 育児・介護サポートシステムの整備

育児・介護研究者に対する研究支援

育児・介護などの家族責任を果たすため、研究所での研究時間に制約のある研究員を対象に、限られた時間を補完して研究活動を継続・維持するための研究支援として、パソコン・専門ソフトウェアの貸与、自宅でも利用できる文献情報サービス、研究補助員の雇用などを実施しています。これまでに、出産・育児、介護を担っている25名（うち男性10名）の職員が利用しています。

利用者の声

◆永田純子さん（野生動物研究領域）は現在1才になる男児の母親です。育児休業を取得中は、ご家族とともにアメリカで子育ての日々を送られました。「息子はとっても手がかかるから、大変よ」と言いながらも、活発な研究活動を継続し、希少野生動物であるアマミノクロウサギの保護に関わる研究論文や、近年、農林業被害を引き起こして問題となっているイノシシの管理に関わる研究論文の発表につなげました。

パソコン貸与

—研究支援でパソコンの貸与を受けて研究環境は改善されましたか？

永田 コストと手間が大幅に削減できたのが助かりました。まず、基本ソフトが全てインストールされていたので、すぐに使用できました。そういったセッティングを自分でしなくて良かっただけでも大変良かったです。また、いろいろと設定がきめ細かくされており、例えば、森林総研の研究関連のウェブサイトが全てインターネットのビューアーのお気に入りに入っていたので、大変便利に使えました。

文献情報サービス

—エンカレッジ事業による研究支援について、どう感じますか？

永田 時々研究所と連絡がとれたのは良かったです。何かあったら相談できる体制が整っていることに安心感がありました。研究支援の実務的なところだけではなく、育児休業中もほっておかれないことに精神的なエンカレッジがありました。

—エンカレッジ事業への要望はありますか？

永田 文献情報のサービスが利用できて大変有意義だったのですが、大学や海外への外部複写依頼ができなかったのが残念でした。そういった制約がなくなるとより使いやすくなると思います。

（取材 平成21年3月）



◆五十嵐哲也さん（関西支所）はもうすぐ2歳になる男の子の父親です。四国地方の大学教員である配偶者は、遠距離通勤で泊まりになることも多いため、週の半分以上は単身で子育てしているとのこと。世間では“主たる保育者”といえどほとんどが女性ですから、戸惑うことが多いのでは？という周囲の心配をよそに、保育園社会にも、時間が不足する生活にも動じる様子なく、落ち着いて子育てと研究を両立されています。

研究補助員の雇用

—森林生態分野の研究を進めている五十嵐さんですが、家庭責任を負う前と後で、どのように生活が変わりましたか？

五十嵐 まず挙げるとしたら、残業ができない、ということでしょうか。それから泊まりがけで出張することが難しいため、遠い所に調査地を設置出来ません。日帰り出張でも、保育園のお迎えに間に合わせるように帰ってこなければいけない、というような制約があります。また家で仕事をしたいと思うものの、そう思うように時間は作れないので、就業時間中にできるだけ効率よく仕事するように努めています。

—現在の研究生活の中で、エンカレッジ事業があって良かったな、と思うことはありますか？

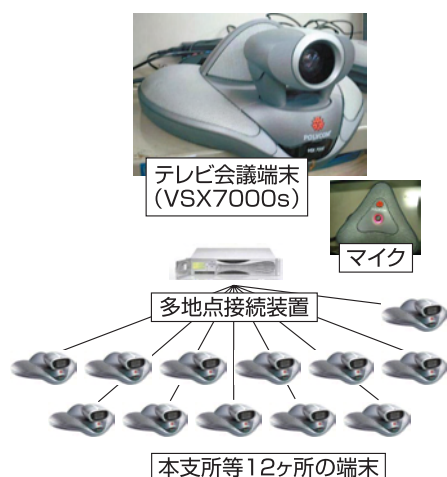
五十嵐 時間に制約のある研究者にとって、研究支援は大変助かります。共働き家庭では、遠距離通勤や別居家族のように家庭の形に無理を生じやすく、仕事にもさまざまな制限がかかります。けれども、従来なら“私事”だから自分で何とかするもの、と考えられていたような事が、エンカレッジ事業によってサポートしてもらえるということは、ありがたいです。今後もサポートの幅をさらに広げつつ制度を維持していった欲しいと願っています。

（取材 平成21年3月）



3. IT環境の整備

出張困難な研究者に対する研究情報を提供し、情報格差を是正するため、本所・支所・育種センター・育種場の間を結ぶTV会議システムや、研究室－自宅間を結ぶWebミーティングシステムなどのIT環境を整備しています。



▲ TV会議システムとTCVシステムを利用した委員会
(本所－支所等間)



▲ Webミーティングシステムを利用した業務報告会
(自宅とセミナー室を結んで実施)

利用者の声

◆石崎涼子さん（林業経営・政策研究領域）は4歳と1歳のお子さんのお母さんとしても忙しい毎日を送っています。研究テーマは、地方自治体による森林整備施策に関する研究など。科学研究費補助金(文科省)による課題「森林・林業助成策の日欧比較分析」は、育児休業による中断と1年の期間延長が認められた所内で最初のケースとなりました。

WEB
ミーティング
システム



—小さなお子さんを抱えながらも、活発な研究活動を続けられていますね。

石崎 育休中には自宅で研究の構想を練ったり、情報収集など多少なりとも研究活動を継続することができ、研究面ではもちろん育児の上でもリフレッシュできプラスになったと思います。自宅からWebミーティングシステムを利用して研究打合せに参加したり、子供が寝てから論文をインターネット経由で投稿したこともあります。

—Webミーティングシステムは初めての試みだったわけですが、使ってみていかがでしたか？

石崎 実際にやってみると・・・システム自体は思った以上に使いやすかったのですが、自宅で子供をあやしながらの打合せへの参加は実際にはかなり難しいなと感じました。実は、研究所内で他の方に子供を見てもらいながら近くで研究打ち合わせをさせていただいたこともあったのですが（写真）、私は議論に集中でき、子供も安心して過ごすことができ本当に助かりました。

—女性研究者に対する支援が始まったばかりだということもありますし、これからも支援のあり方は模索していく必要がありそうですね。

石崎 今回のエンカレッジ事業では、子育てと仕事の両立に関わって気軽に相談できる窓口ができたこと、応援しますよという姿勢をみせていただけたことが何よりも有り難く、心強く感じました。

（取材 平成21年3月）

4. 次世代研究者育成支援

男女共同参画意識の啓発活動

家族責任を持つ職員が働きやすい環境作りの一環として、職員向け意識調査、所内セミナーや研修、公開シンポジウムなどを通して男女共同参画意識の啓発を進めています。

<公開シンポジウム>

- 第1回公開シンポジウム 平成18年1月（つくば国際会議場）
「サバイバル！ 魅力あるれる研究所をめざして」
基調講演 原ひろ子氏（お茶の水女子大学名誉教授）
招待講演 新島溪子氏（元森林総合研究所）
パネルディスカッション
「独法研究所における有効な女性研究者支援策の在り方」
- 第2回公開シンポジウム 平成20年12月（メルパルク京都）
「ワーク・ライフ・システム構築への挑戦」
基調講演 有賀早苗氏（北海道大学教授）
招待講演 東和美氏（株）資生堂）
パネルディスカッション
「独法研究所における多様な家族責任の支援策」
富崎松代氏（奈良女子大学教授）ほか



<所内セミナー>

- 第1回所内セミナー 平成18年9月
「男女共同参画による個人と組織の活性化」
—ダイバーシティマネジメントとワーク・ライフ・バランス—
澤田美智子氏（産業技術総合研究所男女共同参画室長）
- 第2回所内セミナー 平成19年9月
「農林水産業の発展と男女共同参画の推進—女性の視点で何が変わるの?—」
二階堂孝子氏（農林水産省経営局女性・高齢者活動推進室長）
- 第3回所内セミナー 平成20年3月
「職場環境とメンタルヘルス—森林総研の調査結果から—」
大森美香氏（お茶の水女子大学准教授）
- 第4回所内セミナー 平成20年7月
「ニューキャリア時代の人と組織を活かす人間力リーダーとは?」
植田寿乃氏（キャリアカウンセラー）



<男女共同参画意識調査>

- 第1回所内アンケート 平成18年9月実施
- 男女共同参画意識調査報告書 平成21年3月発行
- 第2回所内アンケート 平成21年9月実施予定

遠距離家族のロールモデル紹介

夫婦それぞれの勤務地が遠距離にあるため、仕事やキャリアを諦めないためには別居形態を取らざるを得ない場合もあります。このような困難な状況に直面した時、職場や周囲の人々の理解は不可欠です。

◆**太田祐子さん**（森林微生物研究領域）は木材腐朽菌の系統、分類、生態に関する研究を行っています。夫、10歳のこどもの3人家族ですが、11年前から別居生活を送っています。11年前に、まずは約2年間の長距離別居（夫はイギリス、妻と子どもはつくば）、その後約7年間は短距離別居（夫は東京、妻と子どもはつくば）、2年前の夫のドイツ赴任を機に、今度は組み合わせを替えて長距離別居（夫と子どもはドイツ、妻はつくば）をしています。



—ドイツと日本—超長距離別居、夫と子どもの生活はどうか。

太田 別居の場合、パートナーに頼ることができないところがつらいところですが。今回のことは、仕事人間の夫にとっては「時間制限のある中で仕事と家事育児をやりくり」するという、突然始まったかつてない経験だったと思います。（今回のことは、子どもにとってよりもむしろ夫にとってよい経験?!）海外でもあり、慣れないうちは大変だったようですが、今はなんだか楽しそうに男二人で暮らしています（「なんとかなるものです」by夫）。私自身も、幸いなことに昨年半年間研究助成を受けベルリンの研究所に滞在できました。家族がベルリンにいないければこんな機会もなかったと思います。今は、時間が自由なうちに出来るだけ仕事を進めておきたい、出張も心おきなく(?)したいと思っています。

—別居子育てを乗り切るコツは？

太田 私も夫も、職場の上司やメンバーには、大きなことから小さなことまで今も昔も本当に助けられています。私の場合、子どもが小さいうちは理解と助けなしでは仕事を続けられなかったと思います。先輩ママ研究者の方々にはたくさん励まされてきました。感謝しています。夫もいまドイツで、職場の方々の理解と協力のおかげで何とか日々乗り切っているようです。出張時も、あちこちにお世話になりながらこなしているようです。

—職場の「理解」と協力、周囲の助けは必要なのですね。

太田 そうですね。このエンカレッジ事業が始まって、職場内にもいろんな家族責任を持つ人がいて、皆それぞれのスタイルでがんばっているのだということが、徐々に理解されてきたのではないかと感じます。そのような「気づき」こそが職場での理解と協力への第一歩になるのかなと思います。

（取材 平成21年7月）

◆**大西尚樹さん**（東北支所）は主に哺乳類を材料に集団遺伝学の研究を行っています。大西さんの奥さんは奈良県の研究職員でしたが、今春から北海道大学で博士研究員として研究者としての再スタートを切りました。現在では札幌と盛岡で別居生活をする研究者夫婦です。



—奥さんが終身雇用の県職員を辞めて北大に移った経緯を教えてください。

大西 私が関西支所（京都市）から東北支所（盛岡市）への異動の話が出たときに、一緒に引っ越すため県を退職する事も考えましたが、彼女自身あと数ヶ月で博士号を取得出来る見込みで、また県での研究も軌道に乗り始めていたので、すぐに辞めるのではなく、少なくともあと数年は仕事を続けたいというのが当初の考えでした。そのため私が単身で東北に異動することになりました。しかしその後、北大でポストクの公募があり、そのプロジェクトは彼女が大学院時代から興味があったテーマであることや、関西に残るよりも札幌の方が盛岡に近い等の理由で、かなり迷った上で応募してみたところ、幸いにも採用されました。

—任期付きと言うことで不安は無かったですか？

大西 それはありますね。しかし、私が森林総研の職員である以上転勤は避けられず、県職員である彼女と同居し続けることは難しい状況でした。それならば、彼女自身のキャリアアップにもなりますし、やはり研究者は自分の興味のあるテーマに携わることで最も能力が発揮されると思いますので、好きなことをすべきだと思い、決断しました。

—大西さんもこのエンカレッジ事業の推進メンバーですが、そういった活動で変化はありましたか？

大西 はい、その影響も大きかったですね。この2年間でたくさんの方とお会いして、様々な考えがあることを知りました。多様な考えの人がいて、多様なアイデアが出てくることで、研究に対する視野も広がるのだと思います。男女共同参画関連のシンポジウムや所内セミナー等に参加するたびに、家に帰ってからその内容について2人で議論していました。

—奥さんもエンカレッジされたのかもしれないね。

大西 はい。森林総研の職員じゃないんですけど、エンカレッジされたようですね（笑）。

（取材 平成21年7月）



独立行政法人森林総合研究所 男女共同参画室

〒305-8687 茨城県つくば市松の里1
TEL 029-829-8360, FAX 029-874-8507
e-mail geneq@ffpri.affrc.go.jp
URL: <http://encr.ffpri.affrc.go.jp/>

2009. 9 発行

※この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。